

## 土手の秋

首藤 静夫

コロナ禍で退屈な毎日、一時間のウォーキングが日課である。夕方は残暑でどうにも歩けない。やむなく朝五時起床の早朝散歩に切り替えた。

東の空が染まり始めた頃、人のまばらな多摩川土手をマスクフリーで歩くのは気持ちがいい。

土手はオギ（荻）が群生し、どこまでも続く。オギはススキによく似ているが、ススキが山地に多いのに対し、オギは河辺に生える。ススキ状の細長い葉に朝露が宿り、清澄の気分が漂う。

草むらで虫が鳴いている。やかましい程でなく耳に心地よいが、聞き分けるのは難しい。素人の耳には、キチ、キチとかギィー、ジィーという音が重なって聞こえる。コオロギやキリギリスの仲間だろう。種類が多いようだ。

同じ仲間にウマオイという不思議な名前の虫がいる。細い肢の折り曲げ方から、逃げる馬を追いかける馬方のしなびた足を連想してしまう。先人の観察力やユーモアは大変なものだ。この虫はスイッチョと聞こえる。カネタタキというのもある。チン、チン、チンと金属を叩くような、異質の高い音がする。こちらの名前は平凡だ。

音の美しさでは先ずスズムシだ。銀の小玉箱をひっくり返したような愛らしい音色を奏でている。マツムシがたまにチンチロロと澄んだ音色で聞こえるが、数は少ない。クサヒバリが鳴いている。風から今生まれたようにフィリリリと聞こえる。詩人の立原道造が愛した音色で、詩の舞台となった信州の草原で聞くとさぞ爽やかだろう。

次第にウォーキングやジョギングの人が増えてきた。老若男女を問わず歩き(走り)慣れている。速度やフォームはまちまちだが、リズムが一定で崩れないのに感心する。すぐ前の人の歩調に合わせて見た。ゆっくりに思えたが次第に足が合わなくなった。まあ、競歩する訳ではないのだから自分のペースで歩こう。

一時間後、整理体操の頃には、それまでは赤かった太陽が高層マンションの屋上と肩を並べ、白くまぶしく照らす。今日も残暑が厳しそうだ。